

## 6 アジアでの災害被害調査活動

### 6-1 ソロモン諸島地震津波現地調査

アジア防災センター（ADRC）は、2007年4月2日に発生したソロモン諸島ギゾ島近辺における地震・津波（M8.1、主に津波により死者52名、行方不明9名、被災者数約2万人）の被害発生メカニズム、被災状況、復興に際しての課題等を調査するため、北海道大学、東京大学、産業総合研究所の津波専門家（西村裕一北大助教団長）とともにソロモン諸島の首都ホニアラ及びギゾ島をはじめとする被災地を4月11日から22日までの12日間にわたり訪問しました。

ホニアラでは、同国政府の防災委員会事務局及び国連開発計画（UNDP）において情報収集を行い、4月13日から19日まで、ギゾ島をベースに被災地の島々をボート等でまわり、津波の波高、遡上高、地震による地盤の隆起、沈降、家屋などの被災状況等を調査しました。さらに被災者のインタビューなどを通じて、インド洋地震津波などこれまでの津波の経験や教訓が活かされたか、また、今後の復興に向けた課題や留意点などについての把握を行いました。

調査の結果、地震発生後、早いところで約5分後に大きな津波がギゾ島西海岸（Malakerava 近辺では5m超）やシンボ島北部（Tapurai では約8m）を襲い、さらに数分間隔で繰り返し発生していました（合計3波）。沿岸の村には津波により建物は基礎を残すだけとなるような壊滅状態のところもありました。



しかし、甚大な建物の被害にもかかわらず、死者がゼロ、あるいは少ない集落も多くありました。住民のヒアリングから、①インド洋津波が地震の直後にアチェなどを襲った話や、地域に津波の伝承があり（1939年発生）、地震の大きな揺れを感じてすぐに家族を丘の上に避難させたこと、②海の状況を監視し引き潮に続いて波が来たところを見て迅速に避難活動を行ったこと、③地形的に集落のすぐ裏が小高い丘になっていたところが多かったこと、④発生時刻が明

る時間帯（AM7:40）であったことなどから、犠牲者が少なかったことが明らかとなりました。

一方、ラノンガ島では南海岸で最大3.3m隆起するなど島全体が隆起しており、一方そのすぐ南のシンボ島の北端では1m沈下、ラノンガ島東のギゾ島では30cmから1m沈下していることが観測され、地震を発生させた断層モデルとして、長さ100km、幅35km、走向315度、傾斜35度、滑り量7.5mと推定されました。

調査当時、被災者は余震が続く中、再度の津波来襲を恐れて丘の上の仮設キャンプで避難生活を送っており、今後、元の場所に戻るか、丘の上に移住するかそれぞれの村・個人で考え方が異なっていました。5月8日に同国政府の復興戦略計画がUNDPなどの支援によりまとめられたところですが、住民のニーズ、地域の文化、ライフスタイルに配慮しながら、地域で調達可能な材料を使用し、コミュニティを巻き込んだ形で、政府が中心となり国際機関やNGOが連携しながら復興が進められていく方針が立てられ、今後本格的に復興が進められることとなります。